

岡山大病院産科スタッフ

死産の母親 立ち直り手助け

「グリーンフケア」取り組む

死産によりわが子の生の鼓動を確かめられなかった母親を癒やそうと、岡山大病院産科(岡山市鹿田町)の助産師や看護師が、立ち直りを手助けする「グリーンフケア」を続けている。



衣類などグリーンフケア用の手作り品と岡山大病院産科スタッフ

服手作り思い出残す

「ここで気持ちを整理するため、スタッフが作ったひつぎには、母親に花やおもちゃを入れてもらう。同大学院保健学研究科のカウンセラーが相談にも応じる。

これまでにケアを受けた女性は十人を超え、「悲しいけれど別れを受け入れられた気がする」「足形は大切な宝物」との声が寄せられたという。

佐藤久恵助産師は「死産をなかったものとするのではなく、亡くした赤ちゃんについて語り合うことが大切。家族の一員として思い出に残すことが、明日に向かって歩き出すこととする女性を支援してくれ」と話している。

死産の悲しみから目をそむける期間が長いと、抑うつ症などに至ることもあるといい、「涙を流して、つらい気持ちを表に出すことが大切」との思いから昨年夏、産科スタッフ約十人で始めた。スタッフは、胎児の小さな体に合うレース付きのベビー服や帽子を自宅で作作り。「子どもに何かしてあげることができた」と感じてもらえるよう、服のすそや袖を縫う最後の作業は母親に仕上げてもらい、亡くなった子どもに着せる。

グリーンフケアは、一九九三年から神奈川県立子ども医療センター(横浜)が取り組んでおり、その活動を基に、流産や死産を経験した女性らでつくるボランティア組織「天使のブティック」も発足している。(民直弘)

わずかな時間でも親子で一緒に過ごした思い出を残したい夫婦には、子どもを交えた家族写真を撮影するほか、へその緒や、手形、足形を取った色紙も渡す。きちんと吊